

位置と環境

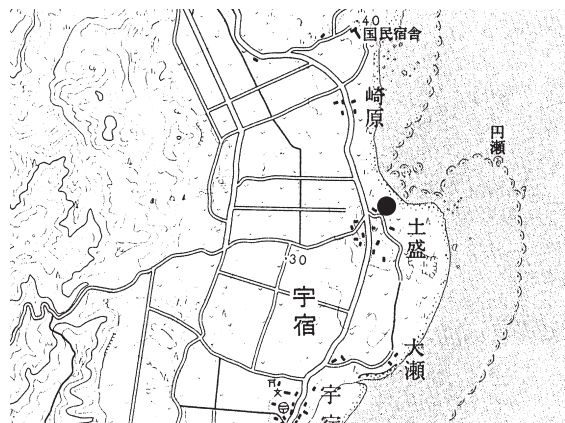
マツノト遺跡の位置する笠利町東海岸は発達した砂丘と発達したリーフに恵まれている。マツノト遺跡一帯も古砂丘から新期砂丘・現砂丘まで続いている。県道を隔てて標高約12m、面積約6,000㎡の砂丘をなしている。砂丘北側は喜子川が流れている。喜子川の氾濫で砂丘が浸食され、砂丘断面に土器や貝殻などの遺物が散乱していたのがマツノト遺跡の発見である。

県道を隔てた古期砂丘上には喜子川遺跡が立地している。その古期砂丘の上にマツノト遺跡の立地する砂丘が被さる状態で形成されている。砂丘は南側にまだまだ続き集落までのびている。

調査の経緯

マツノト遺跡の発見は喜子川の氾濫による破壊だけであった。大砂丘の一部に立地する小規模遺跡と思われた。また、現地表から約6.7mと深かったため、それ以上の自然破壊は進行しないと考えた。1990年夏に喜子川遺跡の発掘調査を行っていた。喜子川遺跡は、南島でも注目される爪形文土器の出土で研究者や大学の研究室などが多く訪れ、調査が行われていた。折しも時代は島全体がリゾート計画に入るような勢いで各地でリゾート開発が行われていた。マツノト遺跡の立地する砂丘も同様にリゾートホテル計画がなされ、砂丘南側から砂採り工事が始まった。ダンプで運び出すたびに砂丘断面を注意深く観察する日々が続く。調査の休憩時間は1人1人がマツノトの砂丘断面観察を行う。そんなある日、ついに土器の発見があり、遺物包含層が露出した。直ちに工事関係者と話し合い、露出している遺物包含層の砂採りを中止して貰う。そして、関係各機関と再三の話し合いの結果1991年に発掘調査を行うに至った。

調査を行った結果、貴重な遺跡であるとして約2,000㎡は地主の理解により、現地保存されている。現在はリゾート計画も頓挫し、残された遺跡は放置されたままである。



第1図 マツノト遺跡の位置

遺構と遺物

マツノト遺跡は大きく第1文化層と第2文化層に分けられている。第1文化層と第2文化層の間には白砂層の間層をはさんでいる。出土遺物にも時間差が見られた。

第1文化層

第1文化層は厚さ約50cmから60cmである。褐色層をなしており、貝や土器がびっしり詰まっている様子である。

出土遺物には兼久式土器を主として土師器、須恵器、水引きろくろ埴、4足土器などの珍しい土器の出土であった。兼久式土器にも貼り付け凸帯文や凸帯文に刻目を有する土器や沈線文を有する土器などが出土しており、数タイプに分類可能な土器である。第1文化層出土の兼久式土器はカムイヤキなどに変わる終末期になるものと思われる。

これまで混沌としていた兼久式土器研究が大きく前進した。

土器のほかに貝製品や貝札（イモガイを加工した



写真1 マツノト遺跡第1文化層検出状況

もので原型の貝、割った課程、長方形に化工したもの、沈線文様の入ったものなどが出土している)、緑色ガラス管玉、鉄製釣り針、刀子、雁又鉄鏃、銅、銅製リング、韃の羽口、貝小玉、有孔二枚貝、貝ひ、貝垂、土垂、土製品などが出土した。

これらの資料が一同に出土したことはおどろきでもあるが、南島考古学にとって重要な発見でもあることは言うまでもない。同様な遺跡が名瀬市フワガネク遺跡でも発見されており、奄美考古学の重要性がさらに追加されることとなった。

白砂層

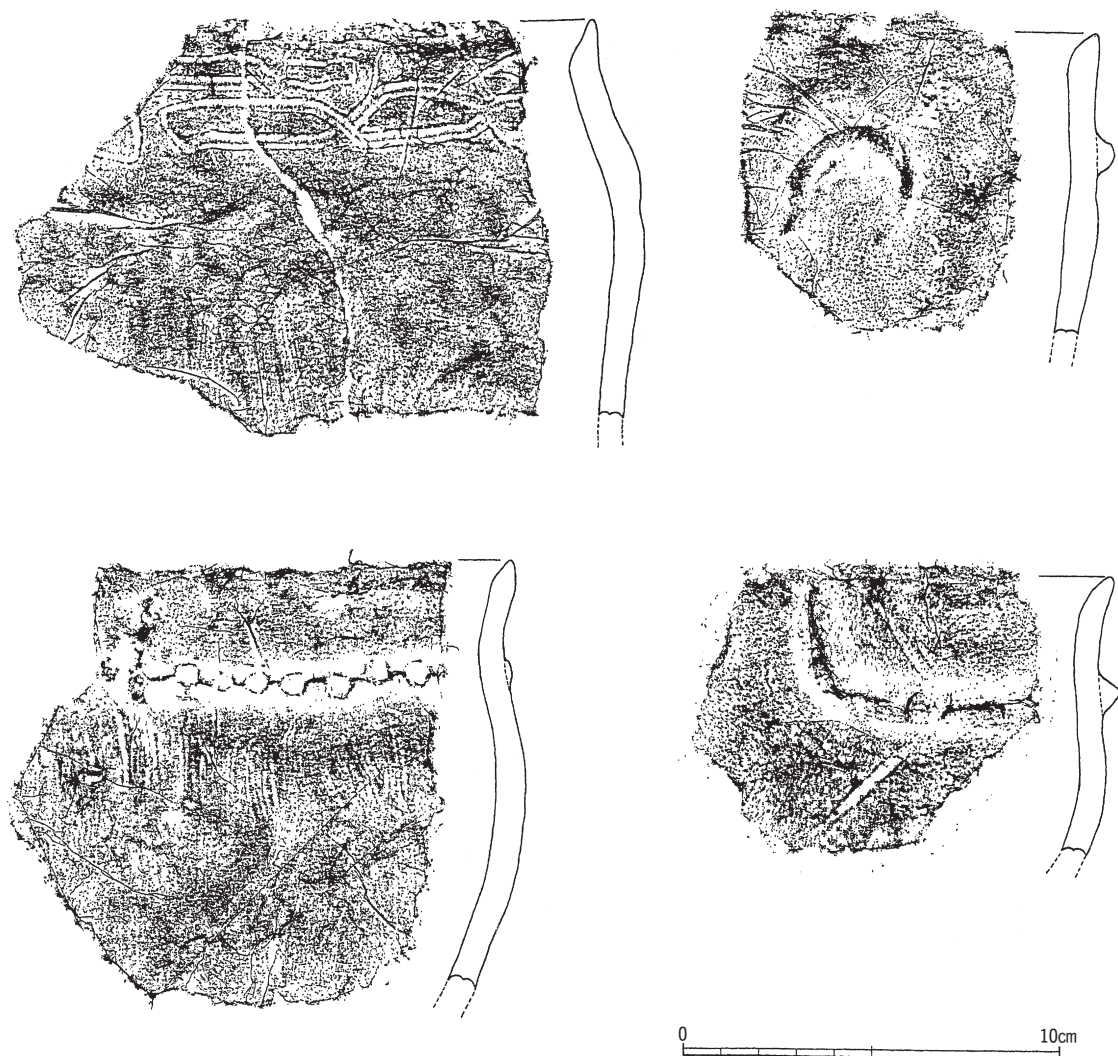
第1文化層と第2文化層の間に間層として白砂層があるが、この白砂層の中からも遺物の出土している。小児人骨、魚骨などが出土している。人骨については小さな掘入みだけであった。土器は薄手の片

口注口土器、頸部に刻目のある貼り付け凸帯文を一条巡らし、口縁と凸帯部分に縦及び斜状の単沈線を有する土器などが出土している。

第2文化層

第2文化層出土の土器は比較的大型土器片が多く出土している。底部に葉痕を有する土器で兼久式土器としてとらえられている。文様も胎土も比較的粗く、貼り付け凸帯文を有さないなどの特徴がある。器形も深鉢形から壺形土器などがある。壺形土器などは第1文化層からも出土している。土器の底部に葉痕を有しているのが兼久式土器としてとらえていたが葉痕を有しない底部も数点出土している。色調や胎土から壺形土器の底部と思われる。

白砂層下層と第2文化層上層では土器のほかにもヤコウガイの大量出土がある。100個体ぐらいのヤ



第2図 マツノト遺跡出土土器

コウガイ溜まりが数か所検出された。貝は焼けたものも多いがおびただしいヤコウガイ製容器の未完成のものや制作途中と思われるもの、制作途中に破損したようなものなどが大量に出土している。これだけのヤコウガイは交易品としても考えられる。今後、遣隋使や遣唐使などの南島路の交易も含めた視野での研究も必要になる。ヤコウガイはある程度加工して持ち運べるようにしていたのか、ヤコウガイ製スプーンも出土しているがヤコウガイの出土量からすると少ないことなど交易品としての問題も残される。

特徴

奄美・沖縄後期の土器編年は流動的であるがマツノト遺跡、用見崎遺跡、名瀬市フワガネク遺跡など



写真1 第1文化層出土貝製品

の土器資料の整理が進むと一挙に解決しそうな勢いでもある。後期の豊富な土器資料と言える。

資料の所在

出土遺物は、笠利町歴史民俗資料館に保管されている。

参考文献

奄美考古学会1992「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』3号

中山清美1995「マツノト遺跡の発掘調査」『シンポジウムよみがえる古代の奄美』

(中山清美)



写真2 白砂層出土の復元土器



写真3 第2文化層出土の復元土器